
悪い男（GW/12）

omotenac

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪い男（GW／12）

【Zコード】

Z0547N

【作者名】

omotenac

【あらすじ】

ガンダムW／ヒイロ×デュオ／大人不倫設定

(前書き)

01年春発行「JEALOUDGY」の番外編です。

二十八歳妻子持ちのデュオに再開したヒイロが迫つて不倫関係開始、というどうしようもない話です。

空き巣に入られた友人宅で徹夜対談とかものすごいことをやっていふどうしようもない本です

なんだかんだいいつついつもの通りラブコメです。なんでもいいから読む、といつ勇者は下へどつぞ。

髭を剃る必要のあつたシャワータイムは約十五分。剃り残しがないことを念入りに確かめてバスルームを出れば、先ほどまでシーツに沈んでいた男はもう回復したらしい。小さくとも一応一人がけのソファの真ん中にどっかりと座りこんでテレビを見ていた。

膝をだらしなく開く姿勢で着ているのはバスローブ一枚。下着は床に脱ぎ捨てられたツイード地のパンツと一緒に裏返しになつたままで、その気になれば薄い布できりぎり隠れた際どい部分を見ることは簡単だらうけれど、十代の若造ならともかくこの歳になつてわざわざ覗き込むつと思つ場所ではないだらう。

特に同性のは。

「飲むもんある？」

どこか不機嫌そうな彼の視線はテレビに釘づけだ。近寄つてくるヒイロの姿を見もせず、愛想のない声がそう訊ねる。

いつも以上に不機嫌なのは仕方ないことだつた。徹夜仕事続きだという彼を無理矢理呼び出した上に、こちらも欲求が溜まつていたからしつこくした自覚はある。

「ビールなら」

だから一応は大人しく、従順にヒイロは動いた。

サイドボードに内臓された冷蔵庫を開けて必要なものを取り出す。缶ビール三本とチョコレート…ジョンソン＆レモン社の一口チョコファミリーパック、800グラムの大袋。どちらも彼のためにヒイロが事前に買い揃えてくるのだ。

ルームサービスで取り寄せるか外で買つてこよつと言つたらそんなに待てないと抗議された時以降欠かしたことはない。

「…サンキュー」

品物をテーブルに置けば、その時ばかりは小さな声で礼を述べてチョコレートの大袋を破る。しかしその間も彼の視線はテレビに釘付

けで、一体なにが面白いのだろう。

自分もテレビに視線を移したヒイロは、しかし画面に大写しのものを見て首を捻るしかなかつた。

「好みか？」

「…………はあ？」

ヒイロの一言に対して、かえってきたのはたつぱり五秒の沈黙と不快そうな表情。

しかめ面の青い瞳はテレビ画面に視線を戻し、それから再びヒイロを見つめて、大げさにため息を吐いた。

「ひーろくん。あのさあ、この人誰だっけえ？」

幼児に尋ねるような物言いで指差されるテレビ画面。赤いソファに体を沈め、インタビュアーに身振り手振りを交えながら熱く意見を述べるのは、名前は覚えていないが顔は良く見る中年の男だつた。確かにこの間シャトルの中で見た映画にも出ていたはずだ。ちょっと剥げた赤ら顔の、そうだ、道で行き倒れていたアンドロイドを少女と思い込んで助け、一晩の宿を提供した故に政府の特殊部隊に殺される不幸な農夫役で。

「男」

だがそんな説明は面倒で、正直に自分の知る限りの知識で答えれば、すぐさま叱咤罵倒を総括する汚い言葉が投げつけられた。

少なくとも彼の現在の生活ではまったく使う必要も耳にする機会もない、今では少し古めかしくもあるスラングが。

「デュオ、そういう言葉は教育に」

「おまえを今さら再教育しろって？ アルファベットからやり直してみる？」

「いや、ジユリアニアに」

「それとお前にやぜんつ……ぜん！ 関係あ、り、ま、せ、ん！」

どうやらいつも以上に機嫌が悪いらしい。娘の名前を聞いた途端彼、デュオ・マックスウェルは激しく首を横に振り、ビールを一気にあおつた。

「つちの娘のことなんかお前に絶対関わられたくないね！」

テーブルに一口チヨコをぶちまけると、セロファンを立て続けにはがして数個まとめて口に放り込む。それに続けてまたビール。すきつ腹にそんな飲み方では悪酔いすること確実だが、忠告すれば叱られることも確実だ。

だから黙つて放つておくことにする。『ダイタイムで借りたこの部屋のチェックアウトまであと一時間ほど。シャワーや着替えの時間を考えれば、ふてくされる時間も残りはそう長くない。

いつだってそうなのだ、『デュオ』マックスウェルという男は。

たとえどんなに怒つても、攻め立てるセックスに泣き濡れても、感情が乱れるのはほんの三十分。

それだけの時間がたてば全く平静に戻つてしまふから、便利ではあるけれど、面白くないとも思う。

妻子と平和に暮らすもいる『デュオ』と十数年のブランクを越えて肉体関係を再開したのは半年前。仕事柄移動が多いヒイロが度々この田舎口口一を訪ねるには結構な無理を重ねているのだけれど、そりやつて時間を作つてどれほど献身的に愛を注いでみても『デュオ』は変わらない。

(肉体は受け入れても、心は受け入れない)

人類の歴史の中、売つても余るほどありふれたそんな言葉が今のはいにはおそらくよく当てはまつた。

知り合つた十五の頃はまだ少し違つていた気がする。大人たちの気の長く、しかし呆れるほどいい加減な計画で地球に送り込まれ、戦場で別れるまでの半年ほどの短い期間。氾濫するドラッグの代わりに互いの手で欲求を吐き出していた頃は、慰めあうなかにもどこか可愛らしい感情があつた。

こういうことはこいつ相手にしかできない。逆に言えば、こいつ相手だからしてもいい。形にするのは怖いけれど、互いの胸の中にあると確信できた淡いものが。

想像しても十五、六の自分が愛の言葉を囁くなんて一百パーセン

ト不可能だとはわかっているが、あの頃なにかアクションを起こしていれば、今は少し違っていたかもしれない、と時折考えることがある。

例えば今、十一月の初め。

クリスマスプレゼントに何を贈ろうかと悩む相手が、愛娘ではなくヒイロ＝コイに対するものであるような、そんな未来を。

「ジュリアが」

そうすると計ったようなタイミングでデュオが娘の名を零す。「クリスマスにさ、このおっさんのベストアルバム欲しいっていうんだよ」

瞬間浮かんだのは、先日も会った八歳の少女の顔。続けて今じがたみた中年男の顔。

テレビに視線を移せば、相変わらず熱弁を奮つ男は今や興奮も最高潮。禿げ上がった額には汗まで滲ませて、監督との出会いは人生における喜びのベストテンに入る、と叫ぶところだった。

「…歌手なのか？」

しかし返せる言葉はそれが精一杯で、笑い出さないよう極力平静な声を出せば、ビールを再び煽ったデュオが大げさに首を縦に振る。「お前知らない？こっちじゃ良くなじてんだけど、旅行のCM」

歌詞もうろ覚えで、うめき声にしか聞こえない短い歌をデュオは何度か繰り返す。

三度目で、どうやらそれはシャトル会社のコマーシャルに使われているものらしいと推測できた。職業柄移動の多いヒイロは月に何回もシャトルを利用する。やたら覚えのあるその曲は、最近エアポートのロビーでうんざりするほど聞かされたものだ。

いかにも南国をイメージさせる、のどかな、しかしどう考へても八歳の少女には不似合いなムードソング。

「…随分渋い趣味だな」

「渋すぎだよ」

困るよなあ。だらしなく体をすり下がっていくから、ブラウンの髪

がソファの背もたれに残る。

これを洗つて乾かすならそろそろシャワーを浴びた方がいい時間だと計算するけれど、珍しく髪を触つても抵抗がない。もう少しだけ傍にいてもいいようだ。ヒイロは背もたれに残る髪を指で梳いた。「こんなカツ」「いいパパがいるのに、よりもよつてハゲの中年だぜ?

アイドルならともかく、おっさんに夢中つてさあ…」

デュオの落ち込みを増長させるようにインタビューや終わり、一瞬あつて切り替わった画面には件の中年男がマイクを持って立っていた。どこからともなく流れはじめる甘いメロディには確かに聞き覚えがある。

出会いは海 青い海で一人 一生忘れない 一度きりの海

とろりとした甘い声は確かに魅力的だが、しかし歌っているのが赤ら顔の禿頭となればどうもぱつとしない。

「ほんと、どこがいいんだらなあ……」

娘のアイドルが中年男であることがよっぽど衝撃らしい。デュオは何度も同じ言葉を繰り返しながら最後まで歌を聴き続ける。時間切れなのか男が歌う画面にはエンドロールがかかり、最後に再登場したインタビュアーの肩を抱き寄せたところがとうとうクライマックス。

一生忘れない 一度きりの海

最後のワンフレーズは高らかに歌い上げ、まばらな拍手と共に番組は終わる。

「なんか、さあ」

真っ黒な画面が一瞬で目にまぶしいジユースのコマーシャルに切り替わると、しかしひどく雰囲気にそぐわない声がヒイロの耳朵を

打つた。

「俺たちみたいだよな、今の歌
ゆるり頭が動き、青い瞳にまともに見つめられる。
キスから挿入までずっと固く瞑られている瞳をそいやつて間近に見
るのは久しぶりで、年甲斐もなくどきりとした。

「そう思わねえ?」

髪を梳く指先に頭が預けられる。猫のようすり寄つてくる髪の
毛。もう三十手前の男のくせにひどく可愛らしいその仕草に激しく
なった脈が悟られないといいが。

「……どの辺が?」

擦り寄ってきた頭を軽くなら、なるべく平静を装つて聞いてみる
と、

「歌詞」

簡潔に答えたデュオは、次の瞬間盛大に笑い出した。腹を抱えて
笑い出すデュオの姿に一体なにが起こったのかわからず呆然と見つ
めていれば、青い瞳は笑いすぎで田じりに涙さえ浮かべて言つのだ。
「だつて『出会いは海』だろ?」

『青い海で二人』つてのはまあリリーナお嬢さんがいたからちよつ
と違うにしても、『一生忘れない一度きりの海』つてさ。
ほら、俺とお前が最初に会ったのも海だろ?」

「……ああ」

どうやらデュオの思考はヒイロの想像のつかない領域にあつたら
しい。

彼がいうのは十五の頃の、自分以外のガンダムパイロットの存在など知らなかつた頃の話。自分の秘密を知つた少女を殺そうとした瞬間、横から邪魔をしてきたのがデュオだつた。

あの頃からすっかり身長も伸びて、顔立ちも代わつた。当時を思い起させるのは男にしては長いブラウンの髪だけだ。

いつも厳しく研ぎ澄まされていた瞳は、結婚し家庭を持つてからはすっかり優しいものに変わつていた。

「あれを忘れるつて方が難しいよな！いきなりモビルスーツ爆破させて自分は水死体で！」

そんな優しい瞳で、無邪気にデュオは笑う。

「撃つたのはお前だ」

「でも、それを助けてやつたのに入様のガンダムのパーティにつり盗つて逃げたのは誰だつたっけえ？」

おじけた口調にしかし反論はできない。そういう、都合の悪い過去を持ち出されてはとても困る。

言い返すことはいくらでもできるけれど、そうなればすぐにデュオは笑顔で関係の終焉を告げるのだ。一応自分が上の立場で始めたことなのに、主導権は確実にデュオにあつた。

「じゃ、これつて俺とお前のテーマソング？そんな曲買わなきゃいけないんだ俺」

サイアク、とまで笑い混じりに付け加えられればさすがに腹も立つ。

「…買わなければいいだろ？」「…

本当にこの男ばかりは。反論するだけ無駄だと改めて思い知り、

ヒイロは髪を撫でる手を外した。

「あ、怒った？」

背を向けて、着替えるためにクローゼットを開ければその頃になつてようやくどこか心配そうな声。

真新しいカッターシャツに袖を通しながら振り返れば、相変わらずバスローブ一枚のデュオは、ソファの上で抱えた膝に顎を埋める、子供っぽい姿勢でヒイロを見ていた。

いい年で、子供もいるくせに、どうしてそんな雰囲気を保てるのか。

「…別に」

この状況でイエスなんて答えられるはずがない。

これ以上立場が悪くならないように視線を逸らし、シャツのボタンをとめていれば素足の足音が近寄ってくる。

「ひーいろ」

妙に機嫌のいい声は逆によくない時の合図で、振り返れば、さきほど机に放つておいたネクタイを手にして「デコオがすぐ傍まで近寄つている。

「ほら、顔出せ」

まだ袖口をとめている途中のヒイロの首筋を引き寄せ、ビラヤヒネクタイを締めてくれるらしい。

同じことをしてくれる女もいなかつたわけではないが、ほとんど視線の位置が変わらない同性にされると、ひどく恥ずかしい気持ちを覚えるのはなぜだろ?!

「次、地球だつて?」

「…ああ」

どうやら情交の最中の言葉を覚えてくれていたらしい。間近に迫る頬にキスでもしてやるつかと思うが、妙に勘がいい男はそれを阻止するようにあわつとネクタイの喉元を締め上げた。

「どの辺り?」

「南半球。ブラジルあたりだ」

「ブラジルつてこうと… ハービー豆?」

「…買つて来よう」

小首をかしげる仕草はおねだりの合図で、これにも逆らひとはできない。

地球ではありふれた植物加工品も、ハローハーでは金に値する高級品だ。けれどそのおねだりは高級品田端ではなく、年上の妻のためだとヒイロは知っている。

宇宙で本物の「ハービー豆を手にいれるためには、都市ハローハーにしかない専門店まで訊ねていくしかないし、グラム単価も田をむくほどのものだ。」ハービー一般的な生活を営むマックスウェル家で常備できるものではない。

「サンキュー。うちの奥さん喜ぶよ!」

あくまで朗らかに微笑み、デコオはぽん、ヒイロの胸元を叩いた。

それだけ。

「じゃ、俺風呂入つてくる」

そそくさとバスルームに飛び込み、無常に締まるドア。

水音に混じつて鼻歌まで聞こえて、それが先ほどの歌だと気が付くと呆れてしまう。

「…俺は便利屋か？」

ネクタイの具合を確かめようと鏡を覗き込み、自分の顔と見詰め合えば自然零れるのはため息。

最初は、確実にデュオ＝マックスウェルを手にいれたつもりでいた。けれど気がつけば自分はただ都合のいい男だ。

呼び出す時こそ自分の都合だけれど、デュオが望むままに会うホテルのグレードは上がり、土産も必須になつた。暇を見つけてはおねだりされた物を探し求め、この地方コロニーまでせつせと運ぶ自分の姿を情けないと思わなくもない。

けれど、ほんの時折見せられる笑顔や、年不相応の妙な可愛らしさに、いや、きっと始めてあつた頃から自分の中にある甘い部分は全てデュオで埋め尽くされていて。

「ヒイロ！ タオル！」

乱暴な声を聞いても体は勝手に反応して、三十路目前の分際で可愛すぎる小悪魔のために忠実に動くのだから、どうしようもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0547n/>

悪い男 (GW/12)

2010年10月10日18時29分発行